

令和3年度学校評価アンケート結果・学校関係者評価結果を踏まえた学校評価のまとめ

千葉県立松戸国際高等学校

領域	重点目標	具体的方策 (具体的な取組、手立て)	評価項目・指標 (評価方法・評価基準)	自己評価の結果 (達成状況、結果の分析)	改善方策 (自己評価の結果を踏まえた課題・改善の方向)	学校関係者評価の結果	学校評価のまとめ (課題と次年度に向けた改善方策)
学校経営	1 組織内の報告・連絡・相談と組織間の連携・協力を意識した教育活動及び学校教育目標の実現を意識した組織的な校務処理を推進する。	① —1 Classiの教職員グループを活用し、適時性の高い情報交換を行う。 ① —2 教職員がそれぞれ担当する教育活動をClassiやホームページに掲載する。	① —1 Classiの教職員グループの活用状況 ① —2 Classiやホームページの更新状況	① —1 分散登校時や、新型コロナウイルス感染症に係る出停時の生徒への課題配信、緊急時の職員・生徒・保護者向けの連絡、各年次、分掌、教科内での情報共有・意見交換等、毎日頻繁に更新され、有効に活用された。 ① —2 保護者あて配付文書については、Classiでの配信も同時に行うようにした。又、日常の授業・部活動の取組、学校行事等については、教職員が、写真や映像を学校HP内「スクールライフ」等へ投稿し、在校生徒・保護者、卒業生、本校入学希望者へ向けて毎日更新を行ってきた。	① —1 今後も、新型コロナウイルス感染症や非常災害等の緊急連絡、生徒の学習保障、業務改善促進のため、Classiの有効活用を行っていく。 ① —2 すでに多くの教職員が頻繁に教育活動についての投稿を行っているが、今後、さらにその数が増えるよう積極的に呼びかけていく。	① —1 Classiを活用することで、生徒への課題配信、緊急時の連絡等が迅速に行われている。教員相互の連絡手段として有効活用することで、業務の効率化につなげてほしい。 ① —2 保護者への連絡にICTを利用することは非常に有効である。又、学校HP「スクールライフ」等への投稿が盛んで、学校の様子がよく分かる。今後も続けてほしい。	① —1 次年度も、Classi教職員グループの有効活用を行っていく。情報共有が徹底するよう、受信率100%を目指しさらなる活用を呼びかけていく。 ① —2 保護者・生徒向けClassi配信とともに、「スクールライフ」へのさらなる投稿を奨励し、又、次年度初めには部活動紹介等、新年度向けに内容の刷新を行う。本校ならではの情報満載のHPづくりを目指す。
	2 働き方改革の推進とコンプライアンス意識の向上を図る。	② タイムカードの記録を活用し日頃の業務改善への取組状況を精査する。	② タイムカードの更新状況	② 毎月、教職員が、各自のタイムカード打刻記録内容の確認、訂正作業を行うことで、業務改善に向けた振り返りが定期的に行えた。	② 時間外勤務の多い教職員へは声掛けや面談をし、業務改善につながる具体的方策を示していく。	② 勤務状況を踏まえて、次年度に向けての業務内容の精選や、分担の平準化に努めてほしい。	② 時間外勤務の多い教職員が減るよう、次年度の校務分掌編成の際、分担の平準化を念頭に調整を行う。

領域	重点目標	具体的方策 (具体的な取組、手立て)	評価項目・指標 (評価方法・評価基準)	自己評価の結果 (達成状況、結果の分析)	改善方策 (自己評価の結果を踏まえた課題・改善の方向)	学校関係者評価の結果	学校評価のまとめ (課題と次年度に向けた改善方策)
学 習 指 導	<p>1 インプットとアウトプットを意識した学習指導及び知的好奇心に火をつける学習指導を推進する。</p> <p>2 評価で育てる「観点別評価」を確立する。</p>	<p>① —1 学力向上委員会による授業力向上研修を実施する。</p> <p>① —2 生徒による授業評価アンケートを実施する。</p> <p>② 学力向上委員会による3観点別評価モデル研究を行うとともに教務内規を定める。</p>	<p>① —1 授業力向上研修の実施状況</p> <p>① —2 生徒アンケートにおける「社会力」を高める授業の項目で肯定的回答80%を達成したか。</p> <p>② 本校独自の3観点別評価方法が完成したか。</p>	<p>① —1 学力向上委員会では、11月後半に2週間の学力向上週間を設け、相互授業参観を奨励し、12月には、授業アンケート実施による各教科担当者の振り返りを呼びかけた。今年度の授業力向上研修は、観点別評価方法関連の動画を視聴、協議を行った。</p> <p>① —2 生徒アンケートにおける「社会力」を高める授業の項目で肯定的回答は80.9%に達成した。</p> <p>② 昨年度から検討してきた3観点別評価方法の原案について、学力向上委員会が中心となり、今年度9月まで協議を重ね、10月以降、最終調整を行ってきた。2月の職員会議をもって本校独自の3観点別評価方法を完成し、教務内規を定めた。</p>	<p>① —1 令和4年度から始まる「観点別評価方法」における課題について、講師を招き指導助言をもらおうといった、授業力向上研修会を実施する。</p> <p>① —2 目標の数値を維持、向上していくために、今後も引き続き創意工夫を重ねていく。</p> <p>② 本校独自の3観点別評価方法を実際に運用していく中、出てくる課題に対応するため、引き続き、学力向上委員会が中心となり、対応にあたっていく。</p>	<p>① —1 学力向上週間はもとより、日常的に相互授業参観を実施し、松国ならではの授業を展開してもらいたい。又、次年度から始まる3観点別評価を指導改善につなげてもらいたい。</p> <p>① —2 引き続き、生徒のニーズに応えた授業内容の実現に期待したい。</p> <p>② 高等学校において、3観点別評価を実際に運用していくには様々な課題に直面すると思われるが、指導と評価の一体化が促進される効果を期待したい。</p>	<p>① —1 次年度の授業力向上研修では、「3観点別評価」により「指導と評価の一体化」につながるための秘訣等について、外部から講師を招き、勉強会を実施する。</p> <p>① —2 次年度はさらに目標の数値を引き上げられるよう、本校で推進しているSDGs17のゴールと教科指導との連携をさらに進めながら、創意工夫を凝らした授業づくりを奨励していく。</p> <p>② 次年度は、3観点別評価方法を実際に運用する中、直面するであろう課題への対応について調整していく。さらに、指導と評価の一体化を意識した取り組みが進められるよう、学力向上委員会を検討協議を重ねていく。</p>

領域	重点目標	具体的方策 (具体的な取組、手立て)	評価項目・指標 (評価方法・評価基準)	自己評価の結果 (達成状況、結果の分析)	改善方策 (自己評価の結果を踏まえた課題・改善の方向)	学校関係者評価の結果	学校評価のまとめ (課題と次年度に向けた改善方策)
生徒指導	1 教育相談活動を強化し、生徒の健やかな心身の育成といじめのない学校づくりを推進する。	① —1 SC等による個人面談を実施する。 ① —2 教育相談・支援委員会による「生活状況調査」を実施する。 ① —3 「学校いじめ防止基本方針」を周知し、いじめを許さない環境づくりを行う。	① —1 個人面談の活用状況 ① —2 「生活状況調査」の結果分析 ① —3 生徒アンケートのいじめ防止の項目で肯定的回答70%を達成したか。	① —1 月に一度来校するSCの個人面談は常時予約で埋まっている。養護教諭を始めとする教育相談・支援委員への相談は日常的に行われ、保護者・担任・年次主任・管理職間で情報を共有している。また、外国人相談室を補習や進路相談のために利用する生徒が増えた。 ① —2 「生活状況調査」実施後、その結果を分析。問題や悩みを抱える生徒が数名見受けられた。 ① —3 生徒アンケートのいじめ防止の項目で肯定的回答は79.1%（前年度比2.9ポイント増）を達成した。	① —1 個人面談の結果については、関係各所で情報共有を行い、迅速で的確な支援を今後も続けていく。外国人相談室のより効果的な活用を推進していく。 ① —2 昨年度と同様、悩みをかかえている生徒には、SC等専門家のカウンセリングにつなげ、問題解決を進めていく。 ① —3 いじめ防止に対する意識の高い結果となった。引き続き、いじめは絶対にあってはならないという指導を続けていく。	① —1 SCの個人面談の回数をもう少し増やせるとよい。外国人相談室の活用により、外国人生徒へのサポート体制を維持していったほしい。 ① —2 調査時だけでなく、問題や悩みを抱える生徒の声を日常的に受けとめることができる体制を維持してほしい。 ① —3 アンケート結果からも、いじめを許さない環境が整っていることがわかる。引き続き、そのような状態を維持に努めてもらいたい。	① —1 次年度も、個人面談の結果に基づいた、迅速で的確な支援を続けていく。又、外国人相談室は特に外国人生徒の進路実現のサポートにより一層力を入れていく。 ① —2 悩みをかかえている生徒への対応は、次年度への引継ぎを丁寧に行い、継続的な支援を続けていく。 ① —3 次年度も、いじめ防止に対する生徒の意識の醸成を目指し、日常的な指導とともに、道徳教育、国際理解講座、人権教育を進めていく。
	2 生徒に考えさせる生徒指導を推進する。	② 生徒指導部・年次主任との連携、道徳教育、国際理解講座、人権教育講話をととして生徒の自律を促す。	② 生徒アンケートのルール・マナーの項目で肯定的回答95%を達成したか。	② 肯定的回答は、登下校時については、97.1%、学校生活については、95.1%となった。	② 目標の95%に達成した。引き続き、工夫を凝らしながら指導を行っていく。	② 自転車通学の生徒が非常に多いので、交通ルールに対する意識の醸成のための指導もお願いしたい。	② 次年度も交通安全指導を始め、様々な行事をとおして、生徒自身にルール、マナーについて考えさせていく。

領域	重点目標	具体的方策 (具体的な取組、手立て)	評価項目・指標 (評価方法・評価基準)	自己評価の結果 (達成状況、結果の分析)	改善方策 (自己評価の結果を踏まえた課題・改善の方向)	学校関係者評価の結果	学校評価のまとめ (課題と次年度に向けた改善方策)
キャリア教育	1 生徒・保護者を巻き込んだキャリアガイダンス機能を強化する。	① Classiやホームページを有効に活用し、進路講演会やガイダンスの内容について逐次発信し、積極的に情報を提供していく。	① 生徒アンケートの進路指導の項目で肯定的回答80%を達成したか。	① Zoomを利用した進路ガイダンスを行ったり、Classi、ホームページを有効に活用して進路情報を逐次発信したり、生徒アンケートの進路指導の項目では、肯定的回答は78.5%（前年度比0.2ポイント増）を達成した。	① 生徒アンケートの進路指導の項目で肯定的回答は前年度より0.2ポイント上がった。引き続き、積極的に情報を発信していく。	① ICTを活用した進路ガイダンスは画期的である。松国生に即した進路開拓につながる情報を発信することで、幅広い視野に立った進路選択をさせることが可能になる。	① 大学進学等、卒業直後の進路のみならず、その先を見据えた、人生設計をさせながら、計画的な進路指導を実現させるためにも、引き続き、積極的な進路情報を発信していく。

領域	重点目標	具体的方策 (具体的な取組、手立て)	評価項目・指標 (評価方法・評価基準)	自己評価の結果 (達成状況、結果の分析)	改善方策 (自己評価の結果を踏まえた課題・改善の方向)	学校関係者評価の結果	学校評価のまとめ (課題と次年度に向けた改善方策)
特色ある教育活動	1 文部科学省「学習指導実践研究協力校」、「教育課程研究指定校」、「教育課程実践検証協力校」千葉県「英語教育拠点校」、「外国語教育小・中・高連携モデル」といった各事業をとおして英語指導力向上を図る。	① ー1 文部科学省教科調査官及び近隣の学校の教職員からの助言・感想を基に、PDCAサイクルによるマネジメントを行う。 ① ー2 今年度のテーマに基づいた研究を進めていく。	① ー1 研究協議会のアンケート結果の分析 ① ー2 研究成果内容の分析	① ー1 文部科学省調査官と県教委指導主事からの助言、又、近隣学校の教職員の意見・感想を基に、PDCAサイクルによるマネジメントを行い、英語指導力向上につなげることができた。「教育課程研究指定校」事業の成果について、2月上旬に全国へ向け発信された。 ① ー2 改訂版「CAN-DO リスト」を活用し、その成果についてのまとめを行った。	① ー1 今年度は、近隣の高校職員限定の協議会となったので、来年度は、小中学校を含め、より多くの方を招待し、様々な助言・感想も取り入れながら、さらなる改善を重ねていく。 ① ー2 生徒のアンケート回答からも、その成果が証明された。今後も、リストを効果的に活用していく。 ② ー1 SDGs 探究活動を本校の特徴的な教育活動とし、高校3年間を通じたプログラムとして定着させていく。 ② ー2 姉妹校、交流校とのオンラインでの活動を計画していく。又、その活動状況周知のため、学校HP、Classi等を利用する。	① ー1 専門家の助言を基に、松国の要となる英語教育の成果が、日本全国に周知されることはすばらしいことである。今後もさらなる発展を目指して頑張ってもらいたい。 ① ー2 松国版「CAN-DO リスト」の研究成果を生かすことで、生徒の英語力を伸ばす指導が実現していることがわかる。 ② ー1 1年次のSDGs 探究活動は松国オリジナルのプログラムと聞いている。他学年でのSDGs 探究活動にも広めてほしい。 ② ー2 オンラインでの活動が行われていることを、もっと、保護者・生徒に周知していく必要がある。姉妹校とのオンライン交流も行ってほしい。	① ー1 次年度は、研究成果を近隣の高校のみならず、県内の小中高に声掛けをし、より多くの方を招待することで、様々な視点からの助言・感想をいただき、研究を進めていきたい。 ① ー2 次年度も研究を継続し、リストを効果的に活用しながら、生徒の英語力を高めていく指導を行っていきたい。 ② ー1 次年度は、1年SDGs 探究活動を2,3年次でどのように発展させていくかについて検討し、新たなプログラムを計画していく。 ② ー2 次年度は、姉妹校、交流校とのオンラインでの活動を実現し、その活動状況について、学校HP、Classi等をとおして、保護者・生徒に広く周知していく。
	2 SDGsを意識した特色ある教育活動や組織的な国際交流活動をとおして、生徒のグローバルな視点を育成する。	② ー1 ユネスコスクール加盟校として、積極的に行事へ参加する。 ② ー2 SDGsをテーマにした探究活動やボランティア活動、国際理解講演会、リモートによる国際交流活動等を工夫して推進する。	② ー1 ユネスコスクールに関する行事への参加状況及び生徒の感想の考察 ② ー2 生徒アンケートの国際理解教育の項目で肯定的回答80%を達成したか。	② ー1 今年度は、特に1年次のSDGs 探究活動が特筆される。SDGs17のゴールを基に生徒自らが課題設定を行い、ポスターセッションを実施した。又、それについては県教委ホームページのフォトニュースでも取り上げられた。 ② ー2 国際理解教育の項目で肯定的回答は52.4%であった。昨年度同様、海外短期留学、海外修学旅行は実施できなかったが、オンラインによる台湾、韓国の高校生との交流を行った。			